

学習指導要領の求める「考えの形成」の授業 －第4学年 草野心平の詩を用いて－

森 成美

要旨

平成29年3月、学習指導要領が公示された。これを受けた「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 国語編」の「国語科の改訂の趣旨及び要点」においては、学習過程の明確化「考えの形成」の重視を掲げ、「ただ活動するだけの学習にならないよう」と述べている。そこで、子どもたちに「考えの形成」をさせるために、まず自分の意見を持たせること、その際、根拠を明確にすること、次に、対話を用いて、他人に自分の意見を話すこと、他人の考えを聞くことで、自分の考えを明確にさせ自信を持たせること、また他人の考えを受け止めることで共感力や深い思考ができることに気付かせていきたいと考えた。教材は草野心平の詩を用いた。詩は普通一編ずつ鑑賞されるが、1時間に四編の詩を扱った。筆者が昨年講師として要請された市川町立川辺小学校で4年生に行った授業を基にした論文である。

キーワード：「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 国語編」「授業改善」
「考えの形成」「根拠」「対話」

1 はじめに

学習指導要領が平成29年3月に公示された。

第1章2 国語科の改訂の趣旨及び要点、(2) 学習内容の改善・充実には、次のように示されている。

- ①語彙指導の改善・充実
- ②情報の扱い方に関する指導の改善・充実
- ③学習過程の明確化、「考えの形成」の重視
- ④我が国の伝統的な言語文化に関する指導の改善・充実
- ⑤漢字指導の改善・充実¹

が挙げられている。本論文は、③学習過程の明確化、「考えの形成」の重視を意識した筆者の実践である。

③の内容は次のとおりである。

中央教育審議会答申においては、ただ活動するだけの学習にならないよう、活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを示すために、平成20年告示の学習指導要領に示されている学習過程を改めて整理している。この整理を踏まえ、〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域においては、学習過程を一層明確にし、各指導事項を位置づけた。

また、全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、「考えの形成」に関する指導事項を位置付けた。¹

では、「考えの形成」とは具体的にどうすることなのか、学習指導要領解説では第3学年及び第4学年では、次のように示している。

オ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えを持つこと。

文章を読んで理解したことに基づくとは、文章の内容や構造を捉え、精査・解釈しながら考えたり理解したりしたことを基にするということである。また、**感想や考えをもつ**とは、文章を読んで理解したことについて、自分の体験や既習の内容と結び付けて自分の考えを形成することである。ここには、疑問点や更に知りたい点などを見出すことも含まれる。

なお、感想をもつことは、自分が文章をどのように捉え、理解したのかを改めて確かめることにもつながる。「構造と内容の把握」、「精査・解釈」に関する指導事項とも関連を図ることが重要である。²

文章の内容や構造を考え理解した上で、根拠のある感想や考えを持たせるということであろう。「考えの形成」とは事実や根拠に基づくものをもたせることが必要である。

2 詩で「考えの形成」の授業をどう作るか

「草野心平詩集」（ハルキ文庫）から4編の詩を選んだ。「春のうた」は光村図書4年生上の教科書に掲載されている。今回はそれに加えて、4編を授業で扱う。「春のうた」・「誕生祭」・「秋の夜の会話」・「冬眠」である。

4編の詩のうち3編の詩の題名を抜き、児童に提示する。「季節はいつか」を1時間の課題とする。詩に書かれた言葉を根拠にして季節を考える。学習指導要領でいう「考えの形成」である。学習指導案は次のとおりである。

(1) 「考えの形成」を具現化

学習指導案では、児童の考えを書き表現させる過程を大切にす。太字で示したところがそれである。

この授業は、市川町立川辺小学校の4年生に筆者が行った授業である。

第4学年国語科学習指導案

指導者 森 成美

- ① 単 元 「蛙詩人」草野心平の詩を味わって表現しよう
- ② 教 材 「春のうた」「誕生祭」「秋の夜の会話」「冬眠」
(光村図書4年上) (草野心平詩集 ハルキ文庫)
- ③ 趣 旨

草野心平は蛙を主人公にした詩をたくさん書いている。蛙を通して「すべてのものと共に生きる」という共生感のあるスケールの大きい野性的でたくましい世界観に魅力がある。本単元では教科書に出てくる「春のうた」だけでなく他に3つの詩を選んだ。それを鑑賞し表現へと導き、他者の表現を認め共に朗読を楽しむ

むことで、共感性や協働性を育む教材にしたいと考え、本単元構成を構成した。

本学級の児童は、話をしっかり聞き、共に学び合う姿勢は育ってきている。活発に発言する児童もいるが自分の思いが発言しにくい児童もいる。特に、初めて行う活動には消極的なところがある。読解力は高いがそれを表現する力には課題もある。4人組で行った連詩作りでは、二連以降はできるが、スタートの第一連を作るのが難しい。初めて行う活動に対する戸惑いからくる消極的な面が見えるところである。

そこで、4編の詩の細部にわたる発問を今回はしない。教師の発問に対し応える活動に飽きさせないためである。一つ「それぞれの詩の季節はいつか」と問い、季節の根拠となる言葉をテキストから探るように導く。児童は独特の擬態語や擬声語等を根拠にして季節を決定し、自分なりの言葉にして発言していこう。それは、新学習指導要領のねらいとする、情報を自分なりに集め整理して表現する力をつけることになると考えるからだ。また、四季の移ろいの中で自然と共に生きている姿を、蛙を通して共感的に感じ取るだろう。

朗読に際しては、始めは「サイレントショートストーリー」の手法を用い、声を出さずに、顔の表情や身体で詩を表現するように促す。児童が他者の表現の面白さに気付き、変わり始めたところで身体表現に朗読を加えていく。そして、蛙の視点を通して描かれた「たくましいのちへの讃歌」を表現し、5年生に進級する児童同士の協働性や共感性を育てたい。

④ 単元目標

<知識及び技能>

- ・擬態語や擬声語の面白さに気付くことができる。
- ・連、編、擬人法等について知る。

<思考力・判断力・表現力等>

- ・季節によって変わる蛙を意識しながら音読できる。
- ・適切なキーワードを選んで季節や情景を捉え、説明することができる。
- ・朗読することのおもしろさに気付くことができる。
- 一人一人の感じ方に違いがあることに気付くことができる。

<学びに向かう力・人間性等>

- ・詩を読む楽しさを味わい、共に朗読することで他者と協働して朗読を創り上げ、それぞれの表現の違いを認め合うことができる。

⑤ 指導計画（全3時間）

次	時	主な学習活動	指導上の留意点	主な評価基準
一	1 本時	草野心平の3編の詩を読む。 3編の詩に題名を付ける。	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの季節を選択する根拠を持たせる。(個別活動) それぞれの「詩の心」を題名に込めるようにさせる。(班活動) 	<ul style="list-style-type: none"> 根拠や題名を書くことができる。 対話を通して自分の考えを説明できる。
二	2 3	詩を朗読する。 身体表現を加えながら朗読発表会をする。	<ul style="list-style-type: none"> 「サイレントショートストーリー」を行い、身体表現させる。 音声と身体表現を組み合わせさせて朗読する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のしたい表現ができる。 他者の表現を認め、協働性のある朗読ができる。

⑥ 本時目標

- ・季節を決定し根拠のある説明ができる。
- ・詩を味わい、詩の題名を書くことができる。
- ・他者と対話し考えを共有することができる。

⑦ 準備物

掲示用 4編の詩 児童用 4編の詩

⑧ 展 開（第1次第1時）

学 習 活 動	指導上の留意点と評価（☆）
<p>1 3編の詩を「季節はいつか」考えながら読む。</p> <p>○2回音読する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回目 範読 一斉音読 ・2回目 一人読み <p>○それぞれの詩の（ ）に季節を書き入れる。 (個別)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・春 夏 秋 冬 ・根拠も書く。 <p>○全体で対話し、詩を読み取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・擬態語 つるつる そよそよ ・擬声語 ケルルンクック ・「●」 何だろう？ 地面からどの辺に冬眠？ ・もうすぐ土の中だね 虫 さむいね <p>○ 草野心平の示した季節を聞く。 ア秋 イ春 ウ冬</p> <p>○ 実は夏を思わせる詩があるので紹介する。</p> <p>2 題が抜けているので、冒頭の□に蛙になってとびっきりいい題名をつけよう。(グループ)</p> <p>○班で話し合っ付けて付ける。(5分程度)</p> <p>○発表する。</p> <p>3 4編の詩の音読と次時の予告。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・草野心平は「蛙詩人」と呼ばれ、蛙の詩をたくさん書いていることを知らせる。詩の朗読会をして見てもらおうと促す。 ・課題をしっかりつかませる。 ・音読に参加しているか。(☆) ・書くのに困っている児童には「どの季節が好き？」と尋ね、季節の違いに誘う。 ・詩は3編、四季なので入らない季節があることを説明する。 ・「～だから」と型を示し、書きやすいようにする。 ・「～と書いてあるから」とテキストから探る考えを褒める。(☆) ・体験を通した発言が出れば大いに褒める。 ・発言は、「テキストから探して話す」・「体験したこと話す」・「人の意見と関連させて話す」とよいことを伝える。 ・自分の考えと比べながら聞くように促す。 ・作者の書いた季節が自分と違っていても、根拠を示すことこそが学力形成になることを話す。 ・「誕生祭」を貼る。 ・範読する。 ・班の話し合いに参加し、題を考え提案しているか。(☆) 「秋の夜の会話」「冬眠」「春のうた」「誕生祭」 ・一つの班に音読させ、次時は朗読発表会の練習をすることを伝える。

ア ()

草野心平

さむいね。
ああ さむいね。
虫がいないね。
ああ 虫がいないね。
もうすぐ土の中だね。
土の中はいやだね。
痩せたね。
君もずいぶん痩せたね。
どこがこんなに切ないんだろうね。
腹だろうかね。
腹とったら死ぬだろうね。
死にたかあないね。
さむいね。
ああ 虫がいないね。

イ ()

草野心平

ほっ まぶしいな。
ほっ うれしいな。

みずは つるつる。
かぜは そよそよ。
ケルルン クック。
ああいいにおいだ。
ケルルン クック。

ほっ いぬのふぐりがさいている。
ほっ おおきなくもがうごいてくる。

ケルルン クック。
ケルルン クック

ウ ()

草野心平



(2) 授業を行って

「考えの形成」のために実際にどのような工夫をしたか示す。

○ア・イ・ウの詩の季節とその根拠を書く。

ここでは、個別に考えるようにさせた。

「考えの形成」のためには、互いにぶつぶつとつぶやきながら考えて書く姿を褒める。黙って個人作業をすることを強制しないようにした。学びの場としてつぶやきを大切にした。

- ・「もうすぐ土の中だね」と書いてあるので秋だ。
- ・「寒いね」が3回出てくるから冬だ。
- ・食べ物を食べ終わって、「寒いね」と言っているから冬だと思った。

「あなた方の素晴らしいところは、テキストと言いますが、教科書に書いてあることから根拠を見付けているところです。」と「考えの形成」に必要な根拠を探そうとする姿勢を褒めた。

- ・冬眠の前だから、食べ物をたくさん食べるから、冬である。
- ・冬眠の前は秋だからです。

「～だから」を使おう

- ・「虫が鳴いてるね もうすぐ土の中だね 虫が鳴いているね」だから、冬の前だから秋だ。

「体験を話す」ことも根拠として素晴らしいです。

- ・冬眠の前は秋だから
- (答えは示さない。)

次の詩へいく

春が多数

夏派

- ・夏だという理由は、まぶしいから。
- ・「大きな雲が動いてくる」と書いている。夏は雲がもくもくと出るから。

春派

- ・「風はそよそよ」で春だと思った。
- ・土の中から出てきて「まぶしい」から。

まぶしいをやってごらん

- ・手をかざし動作化する。
- ・「みずはつるつる」
- ・「大きな雲が動いてくる」は冬眠していて久しぶりに見るから春だと思った。
- ・「あぁいい匂いだ」

長い冬眠からさめてやっと地面に出られたから「うれしいな」なのだと思う。

地面に出たら何かいいことはあるの。

- ・日向ぼっこできる
- ・動き回れる

(答えは示さない。)

次はウの詩である。●をどう読むかである。

- ・難しく書けなかった

それではお隣と対話してごらん。何書いたって…。

戸惑いの空気が教室に流れたので、対話させる。「考えの形成」のためには臨機応変な対話が必要だ。

- ・●が蛙に見えたので夏だ。
- ・イが春なので関連させてウは夏にした。
- ・冬にした。何もないイメージが冬にはある。だから冬にした。

整理をする。

草野心平さんは、実は3つの詩を季節を意識して書いています。

アー秋 イー春 ウー冬

ウを冬と書くと、騒然となる。

ウの●は何かな。

- ・蛙

では、冬の蛙になってもらいましょう。

- ・机の下に入って丸くなる子がいる。 →



(椅子のしたに潜り冬眠する蛙を表現する児童)

季節でないのはどれ？

- ・夏

実は夏とは書かれていないが、夏と思われる詩があるのです。紹介します。

誕生祭

草野心平

われらのゆめ

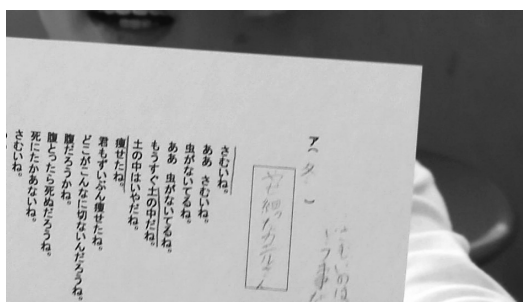
よあけのあのいろ

われらのうたは

ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ
ぎゃわろっぎゃわろっぎゃわろろろりっ

- ・口々に笑いながら、「誕生祭」を読んでいる。教室中が蛙の合唱である。

3つの詩に題名を4人グループで作ってもらいます。



(秋の詩に「やせ細ったカエル」と題名を付けたグループ)



(グループ対話の様子)

子どもたちが考えた題名

秋 ・冬眼前のぼく

・もうすぐ冬です

・蛙が蛙の穴に帰る

春 ・おはよう

・かえるの旅行

・おはようサン (太陽とあいさつをかけたもの)

冬 ・静まりがえる

草野心平がつけた題を紹介する。

秋…「秋の夜の会話」

春…「春のうた」

冬…「冬眠」

夏…「誕生祭」

「考えの形成」のためにこころがけたことは、子どもが獲得した語彙を使って、自分の言葉で考えることであり、作者草野心平の題名に近づけることではないことである。「考えの形成」とは、自分の言葉で表現できることを目標とするものである。

3 終わりに

○焦点化した授業構成

4編の詩を、「季節は何か」という課題で、自分で根拠を基に「考えの形成」に取り組んだ。初めて出会った子どもたちであったが、よく考え自分の考えを述べていた。

詩を読み、「季節を考える」こと「題名をつける」ことの2点に焦点化して授業を構成することで、子どもの考えが向上し形成されていったと考える。

○「考えたせたい」ところを、(??) 不明にし、個人思考や対話によって考えをもたせていく。
今回の授業では、(季 節) と 題 名 を隠し、自分で考える所へ追い込んでいく。自分の体験や既習の内容と結び付けて自分の考えを形成することができたと考える。

また、「●」をどう解釈するか戸惑いが多数見られたので、予定にはなかったが対話を入れた。すると空気が一変し、お互いに意見を交換し、自信をつけていくことが表情や言葉から読み取れた。

参考文献

草野心平詩集（ハルキ文庫）

引用文献

- 1 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編 第1章2 国語科の改定の趣旨及び要点、(2) 学習内容の改善・充実、③学習過程の明確化、「考えの形成」の重視 p 8～10
- 2 学習指導要領解説 p 111～112 考えの形成